

# 授業談話データベースによる実態調査 —フィルターの様相—

小林 美恵子

## 1. はじめに

フィルターは「本来の語彙的な意味から離れて用いられ、それを削除しても発話全体の命題的な意味が変わらないような語句」（野村1996）「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、発話の一部を埋める言葉」（山根1997、2002:38）などと定義された「アノ」「エー」「エート」「マー」などの語を言う。中島（2011:183-184）は、これを「それを取り去っても伝達する文・談話の命題内容に変化を及ぼさないもの」と定義し、『女性のことば・職場編』（1997）の職場における男女の自然談話資料中のフィルターについて、①母音型、②コソア型、③エート型、④ナンカ型、⑤マー・モー型、⑥ソー型、⑦ハイ型、⑧ヤー型、⑨へー・ホー型、⑩ホラ型、⑪デ型、⑫ネー型の12種に分類した<sup>(1)</sup>。また、その機能について、1：談話進行の管理機能、2：間つなぎ語<sup>(2)</sup>として発話展開に関与する機能、3：話し手の心的態度の表出の機能、4：言いよどみの機能<sup>(3)</sup>、5：発話開始と終了を示す機能の5種に分類し、このうちいくつかの機能を併せ持つフィルターもあるとした。さらにこれらの機能はフィルターの発話中の出現位置にかかわるものであることを指摘している。

小論では、中学・高校の授業の録音を文字化した資料により、教師の授業談話にフィルターがどのように現れているかを、中島（2011）の、職場における自然談話の調査・分析結果と比較し、記述・分析する。なお、この職場の自然談話データベース『女性のことば・職場編』（1997、以下『職場』と略す）は、当時筆者自身も作製に参加したものである。

授業談話には一般に教師から生徒への一方的な講演的な要素と、生徒と教師の交互のやり取りによる対話的な要素とが含まれる。この点で、プレゼンテーションを含む会議など一部を除く、職場での一般的な自然談話とは異なる

る出現傾向を示すことが考えられる。また、より意識的に授業内容を生徒に「わからせる」という立場から、聞き手の注意を喚起する、言いよどみを避けるなどにフィラーが意図的に用いられたり避けられることも予想される。このような点を明らかにするために、小論では授業談話中の教師の発話についてのみ分析を行った。授業の談話資料については2007年度日本学術振興会科研費補助金の助成を受け実施した首都圏の中学・高校教師30名各1単位時間(45分～50分)の授業録音を文字化したデータベースによった。

## 2. フィラーの数量的な出現実態

まずフィラーの数量的な出現実態を[表1]に示す。本データベース中の教師発話レコード総数は14,248件、そこに現れたフィラーの総数は6,984件(対総数比49.0%)であった。中島(2011:187)によれば『職場』発話レコード6,000件から1,630件(27.2%)のフィラーを抽出したとのことであるから、授業のフィラー使用は『職場』より相当多いことになる。

1人の教師が1単位時間中に発話するフィラーは平均233件(男228、女238)である。最も多いものは666件、少ないものは79件と、その差は大きく、フィラーの頻度には個人差があることが察せられる。

[表1]に見るとおり、授業談話では、「エー(エを含む)<sup>(4)</sup>」が総数比21.4%と最も多く、次いで「ハイ(ハーイ)」、「ネ(ネー)」、「デ(デー)」、「エート(エット・エートー)」、「アノ(アノー)」、「マー(マ)」の6語がそれぞれ10%内外現れ、以上の7語でフィラーの80%以上を占めている。

この様相は②コソア型の特に「アノ」「アノー」が32.7%を占めた『職場』のそれとはかなり違っている。①母音型、②コソア型、⑩デ型が比較的多い点は『職場』と共通しているが、『職場』では第7位以下だった「ハイ」や出現が僅少であるとして分析に加えられることさえなかった「ネ」が多く出現するのも授業談話の特徴と言えよう。

授業談話で特に多かった7語について、その出現位置を見てみると、「エー(エ)」「アノ(アノー)」「エート(エット・エートー)」「マー(マ)」は発話冒頭(発話頭と呼ぶ)、発話途中(発話中と呼ぶ)に現れるが、特に発

[表1] 授業談話におけるフィラーの出現状況

	女	男	発話頭	発話中	発話末	1語文 フィラー	合計	総数 比%
① ア (アー)	138	192	204	124	2	0	330	4.7
エー (エ)	903	595	437	1053	8	0	1498	21.4
オ (オッ)	4	63	25	41	1	0	67	1
② アノ	358	236	109	480	5	0	594	8.5
ソ (ソー)	21	8	6	16	5	2	29	0.4
ソノ	47	32	10	69	0	0	79	1.1
コ (コー)	52	65	16	100	1	0	117	1.7
コノ	34	24	14	44	0	0	58	0.8
③ エート (エツ、 エートー)	337	320	204	448	5	0	657	9.4
④ ナンカ	81	48	28	96	5	0	129	1.8
⑤ マ (マー)	175	323	169	328	1	0	498	7.1
モ (モー)	40	40	21	55	4	0	80	1.1
⑥ ウーン	10	19	23	5	1	0	29	0.4
ウーント	8	2	3	7	0	0	10	0.1
⑦ ハイ (ハーイ)	341	535	525	99	133	119	876	12.5
エエ	2	46	26	9	13	0	48	0.7
ウン (ン)	78	97	49	32	70	24	175	2.5
⑧ ヤ (ヤー)	1	0	1	0	0	0	1	0.01
⑨ へー	0	1	0	1	0	0	1	0.01
ホー	0	0	0	0	0	0	0	0
⑩ ホラ	8	24	2	28	2	0	32	0.5
ホレ	0	1	0	1	0	0	1	0.01
⑪ デ (デー)	421	401	712	110	0	0	822	11.8
⑫ ネ (ネー)	275	578	153	338	262	100	853	12.2
合計	3334	3650	2737	3484	518	245	6984	100

話中に多く、発話末尾（発話末と呼ぶ）に現れることは少ない。「デ（デー）」も発話頭と発話中に現れるが、こちらは圧倒的に発話頭が多い。「ハイ（ハイ）」は発話頭、中、末いずれにも現れるが、発話頭が特に多く、ついで発話末に現れている。「ネ（ネー）」については発話頭、中、末それぞれに現れるが、発話中が多く、発話末がこれに続く。なお、このフィラー「ネ（ネー）」は前の語に続く助詞としてでなく、発話中や発話末において直前の語との間に一定のポーズを置いて、独立した語として発話されたもののみを認定した。

また、「ハイ」「ネ（ネー）」と「ウン」「ソー」については、前後発話の間に、発話の冒頭でもなく、前発話の末尾とも言えないポーズを置いて現れ、かつ前発話に対する応答詞として用いられているのでもない、独立した発話が見られる。このようなものを小論では「1語文フィラー」と名づけ、別に数えた。「ハイ」「ネ（ネー）」が多く、それぞれ119件、100件が現れている。

中島（2011:188-191）によれば『職場』では、「エート」は発話中より発話頭に出現することが多いというが、授業談話では発話中の出現が発話頭の倍以上である。また、『職場』でも発話頭の「ハイ」「ハイッ」の出現は指摘されているが、1,630件中の4件に過ぎない。授業談話では「ハイ（ハイ）」876件中525件が発話頭の出現であり、『職場』には現れない発話中、末、また1語文フィラーの「ハイ」とともに、特徴的なフィラーとなっている。また、中島（2011:187）では「ハイッ」が発話頭に、「ハイ」は発話末に現れる傾向があるとするが、授業談話では「ハイッ」の出現はみられない。「ハイ」は男性には現れず、女性に11件見られるが、発話頭7件、1語文フィラー4件で、発話中、末に現れることはなかった。

### 3. 機能から見た授業談話のフィラー

授業談話において『職場』とは異なる出現様相を示したフィラーを中心に、その機能から、なぜそのような出現の特徴を示すのかを考える。フィラーの役割、機能については先行研究も多く、それぞれの定義、論及がされているが、紙幅の関係もあり、小論ではそれらの先行研究を踏まえて中島（2010 :

194) が整理した前掲の5分類を参考とし、フィラーの出現位置により、その機能を考えていくこととする。

### 3.1 「デ」「ハイ」「エー (エ)」

本調査で、発話冒頭によく出現するフィラーは件数が多い順に「デ」「ハイ」「エー (エ)」であった。これらのうち、「デ」は発話中にも現れ、「エー (エ)」は発話中の出現のほうが多い。「ハイ」は発話中・末ともに現れる。以下に具体例をあげながら、これらのフィラーの機能を概観する。(以下、下線部は筆者による。「↑」は上昇アクセント、「\*\*」は聞き取り不能だった部分である。なお末尾の [] は話者を表す。[男40工芸] は男性、40代の工芸という教科の授業である。以下同様)

「デ」

(1) だいたいの流れ、こないだ全部\*\*と名称書いたね。 [男40工芸]

で、これで茶の湯で、ほぼ桃山時代のものは、えー、やっています。

[男40工芸]

で、ちょっとだけひとつ、えー紹介しておきたいことがあるので、今日プリントを持ってきたんだけど、教科書の二十八ページを。

[男40工芸]

(2) 自分自身の像を山門にどかどかと、こう、作って飾ったんだよ、ね。

[男40工芸]

え、でも違ったよ。テレビで [生徒女]

で<sup>①</sup>、これを作って、秀吉の怒りをかって、切腹する。 [男40工芸]

違うよ。 [生徒女]

違う↑ [男40工芸]

テレビで違うって言った。 [生徒女]

で<sup>②</sup>、で、どんな話かな。 [男40工芸]

(3) はい、えっと、はしごから上へ飛び上がって、で、老婆を問いつめた  
というか、老婆をね、あの、倒して、引き倒して、問いつめるという、

そういう行動にでます。

[女30現代文]

発話冒頭に現れる「デ」は談話進行の管理機能のうち、発話権を維持する働きをされると言われる。(1)のように、同一話者が一連の話をする際に、1発話ごとに発話頭に用いられ、自分の話が続けていることを示すことが多いが、(2)のように、①話をさえぎる他者の発話をあたかも無視するかのようにより自身の発話権を維持しようとする場合、②他者の発話を受け入れつつ、自身の発話の続きとして談話を進行しようとする場合の発話権の維持に使われた例もある。いずれにせよ、自身の発話権を維持し、現発話が前発話の内容に関連があり受け継ぐものであると言う意の含まれるフィルターである。

(3)は発話中に現れる「デ」の例であるが、中島(2011:208)では、このような「デ」には注意喚起の機能があるとする。後続の「老婆を問い詰める」という行為への注意を喚起するのである。「デ(デー)」が、あるひとまとまりの授業内容を生徒に伝達するために教師の発話が続いているのだという意思表示と、さらに次の発話への強い注意喚起のために授業発話に多用されるのは納得できることである。

「ハイ」と「ウン」

(4) はい、じゃ、はい、じゃあはじめましょう。 [男20数学]

(5) はい、手を止めてください。 [男20英語]

(6) はい、インカの人たちはどんなことをしたの↑ [女40英語]

(7) はい、じゃあ、漢字テストします。 [女50現代文]

(8) はい、水、金、地、火、木、土、天、海、冥、みんなこういう、同一、  
ほぼ同一平面上を回ってるから、太陽系は平たい円盤ですよ、はい。  
[男50代化学]

(9) え、一を無理やり二の0乗(ゼロじょう)って考えて、はい、つまり、  
今、ここで考えてんのは二だから、二の仲間っていうんで、二で表す。  
[男50数学]

(10) 三十九ページの二十行目から、えー、四十ページの四行目まで、はい、  
読んでみましょう。 [男50国語]

- (11) これはちょっと珍しいですね。これね。 [男50物理]  
うん、で、これが理想的かどうかわかんないよ、これ。 [男50物理]
- (12) で、意味知らなきやもう入れようがないんだから、別に辞書を使っちゃいけないっていうわけじゃないんだからさ、うん、わかんないならちやんと調べて。 [男20英語]
- (13) 三人ぐらいいだから全部書いてみるか、うん。 [男30数学]

「ハイ」(4)～(8)はいずれも先行発話のない非応答表現として用いられており、発話開始を明示している。中島(2011:195)が、発話末尾の「ハイ」とともにフィラーとし、発話開始、発話終了の機能を持つとしたものである。見てのとおり、教師の性別・年代・教科にかかわらず用いられ、発話頭に現れる「ハイ」の教師一人当たりの平均は17.5件に上る。「ハイ」は同じく談話の開始部に現れる「エー」や、「アノ」などに比べて、はっきりと境界を示し、後続の発話内容に、提案・勧誘・行動の要求・回答の要求などを含むことが多い。教師が生徒の注意を喚起し、談話の開始をより明確にするものとして、『職場』などの自然談話よりも頻繁に使われているのだと考えられる。

(8)には発話末の「ハイ」の例もあるが、この「ハイ」は発話終了を明示する機能を持つ。発話終了を示すフィラーとしては他に「エエ」「ウン」「ネ」が現れているが、これらより対人配慮的な要素が希薄なので「ハイ」はよりはっきりと発話境界を示すと言えよう。

発話中に現れる「ハイ」(9)は注意を喚起しつつ発話権を維持する「デ」と同じような機能を持つ。また(10)は、発話冒頭の「ハイ」と同様に、それまでの発話に続けて、新たな談話内容を提起することを明示する働きをしている。発話中に現れる「ハイ」は概ねこの2つの機能のどちらかを担っているようである。

「ウン」(11)～(13)は「ハイ」と同じく応答詞系のフィラーであり、発話境界を示すが、「ハイ」のように明確な談話開始表示の機能はもたない。同じ発話者の前発話に引き続き発話権を維持する(11)、間つなぎ語として機

能する (12)、発話終了を明示する (13)、いずれの場合も前発話の内容を確認する機能も持ち、対人配慮としてインフォーマルな和らげの働きもするようだ。また、話者の中にはフィラーとしてはおもに「ハイ」を用い、応答詞として「ウン」を用いるというふうに使っている場合もあり、「ウン」のフィラーとしての出現はそれほど多いとは言えない。

「エー」と「ア」

(14) 先生、[名字]さん、来ました。 [生徒女]

あ、[名字]さん。 [女40世界史]

(15) もっと強く、もっと強く。 [生徒男]

いや、今ぐらいでいいよ。 [男50物理]

今ぐらいでいいけど、あの、ちょっと回っちゃった、今ね。 [男50物理]

あ、もうちょいかな。 [男50物理]

(16) えー、目指す、えー、ということは、えー、これ以上の高い理想というのを必要としない、えー、というのが、えー、近代の大衆でした。

[女30現代文]

じゃあ、近代の大衆に対して、近代の選ばれた少数者っていうのがいたんですね。 [女30現代文]

えー、選ばれた少数者なんですけど、えー、これは具体的にどういう\*\*を。 [女30現代文]

『職場』では発話頭に出現し発話境界を明示するフィラーとして最も多く出現したのは「ア (アー)」であった。しかし、授業談話では「エー (エ)」がはるかに多い。これは「ア (アー)」には心的態度を表出したり、前発話を補正したりという機能があるためと考えられる。(14) は心的態度としての「気づき」の表明であるし、(15) は前発話の「今ぐらいでいい」を補正するための「ア」である。これらは例のように出欠確認や理科実験など生徒との対話の場面で現れ、講義など一方向の談話には比較的少ない。『職場』の自然談話に多く授業談話に少ない所以であろう。「エー (エ)」はより単純に発話の切り出しを表示する。したがって (16) のように話者が単独で談話

を進行していく講義のような場面に出現しやすいと言える。発話中の「エー (エ)」も同様に、ポーズ (間) が入る位置にこれを埋めるためのつなぎの語として「エー (エ)」が多用されている。

### 3.2 「アノ」「エート」「マ・マー」「ネ」

発話途中に最も多く出現したのは前掲「エー (エ)」であるが、ここではそれ以外の発話途中に比較的多く現れているフィラーについて論じる。

「アノ (アノー)」

(17) あの、よくねえ、映画館でねえ、なんか試写会みたいなので、感動しました、涙出ましたとか、の、あれは嘘だなとわたしは思うの。

[女50現代文]

もっとう、どーんと来るような、なんかこう、衝撃を受けることってない↑もっとう

[女50現代文]

あの一、単にねえ、あの、どう、ちょっとねえ、説明しにくいんだけどねえ、悲しみっていうのはねえ、あの一、意外とねえ、万国共通ね、悲しいことは悲しいっていうのは、わりとお互いに共有できるんですよ。

[女50現代文]

「アノ (アノー)」は発話頭にも発話中にも現れるが、発話中に多く、発話頭には比較的少ない。(17)の話者は30人の教師の中で最も多く「アノ (アノー)」を用いている。(17)では発話中の「アノ (アノー)」は間つなぎ語として、発話頭の「アノ (アノー)」は発話権の維持のために用いられている。

中島 (2011:198) では、発話頭の「アノ (アノー)」について、「話し手はこうした発話を切り出すフィラーを使うことによって、相手に提案・説明等の働きかけを行う。相手も肯定の応答詞で応じる」とする。授業の談話では、しかしこのように先行の話者に対するような発話頭のフィラーは見られない。これはもちろん、授業談話の中に「教師が肯定の応答を求めて提案・説明の働きかけをする」という状況自体が少ないことによるのであろう。発話末に使われる場合には「アノ (アノー)」は言いよどみ・言いさし<sup>(5)</sup>になる。

発話の切り出しや発話中の間つなぎ語としても「ハイ」や「エー」「デ」に比較して断定の度合いが低く、次に言う語の選定に逡巡したり、相手の意向を気遣うという意味合いのあるソフトなものと言える。その意味で講義中心の授業談話などでは選ばれないのだと考えられる。

「エート」「マ（マー）」

- (18) ま、それぞれの性格の、ね、再確認は、えーと、みんな大丈夫だと思いますが、えーと、ちょっと続けて、えーと、読みます。

[女30現代文]

えーと、書きながらちょっと聞いてください。 [女30現代文]

- (19) それでは、えーと、まあ、今から三十年以上も前の話になるかもしれないですけども、えーと、まあ、カンボジア、今でもね、えーと、その、なんていうんですかね、えー、傷跡は残っていますし、いまだに立ち直れずに、えーと、つらい思いをしてる人たちは数多くいる、わけ、ですね。 [男40英語]

「エート（エット・エートー）」はきわめて個人差が大きいフィラーで、総計で男性320件、女性337件が出現したが、男性1人で180件、女性1人で105件用いているものがあり、それぞれ総数の大きな部分を占めている。よく使用するのはこの2人では(18)(19)のように1発話中に頻発する例も見られる。機能としては、発話中では間つなぎ語として、発話頭では(18)のように、発話交替に関与せず前発話と同一話者の発話の切り出しに用いられることにより発話権を維持するものである。いずれの場合も、次の語を断定することへの逡巡というような心的態度も表わす。

「マ（マー）」も、発話頭ではソフトな発話の切り出し機能を持ち、発話中では間つなぎ語として機能するとされる。ソフトというのは断定的・主張的側面を回避し、切り出しや、また間つなぎ語としても発話の主張を和らげる機能を持つということである。「マー」が(19)のように「エート」と共起することにより、さらにこの和らげの機能は増すと考えられる。

授業談話ではこのような「エート」や「マ（マー）」は一般的ではなく、

限られた人がいわばことば癖のように使っているということが、本調査の結果には現れていると言えよう。教師が授業談話において主張を和らげたり、断定を回避したりすることはほとんど必要とされず、むしろ伝えるべきことをはっきりと伝えることが要求されているからである。

「ネ（ネー）」

- (20) no reason、理屈。 [生徒男]  
おお、すごいね。 [男20英語]  
ね、理由とかね、理屈ですね。 [男20英語]  
理由とか原因、ね。 [男20英語]  
その原因の一つは、ね、is that、that以下が、ね、なにかというと、  
the world is getting smallerなんだって。 [男20英語]
- (21) まあ、世界でどんどんどんね、国境も関係なく。 [男20英語]  
グローバル。 [生徒性別不明]  
ね、言語もね、えー、交流が深まってくるよね。 [男20英語]

「ネ（ネー）」は『職場』では3例ほどしか見られず、出現が僅少であるとして中島（2011）では例示・考察の対象からはずされている。しかし授業談話では、発話頭、発話中、発話末、そして1語文フィラーとしたものも含め853例を数え、非常によく使われるフィラーと言える。(20)の発話頭の「ネ」は話者自身の前発話に引き続き発話切り出しをすることにより発話権維持の機能を持っている。このような使用例が多いが、(21)では別の話者の発話の後に現れ発話境界を示している。心的態度の表出としては「ネ（ネー）」は確認をしつつ同意を求める機能を持つ。終助詞「ネ」はポライトネス機能を持つと言われるが、フィラーの「ネ」にもこのような働きがあると言えよう。間つなぎ語として発話中に現れるもの、発話終了の明示として発話末に現れるものを含め、談話内容をソフトに、しかし確固として同意を求めるといのは自然談話に一般的な状況とは思えないが、授業に要求されるのはまさにそういう談話進行であることが、このフィラーの多用に現れているのではないだろうか。

### 3.3 1 語文フィラーとしての「ハイ」「ウン」「ネ」

- (21) 確認をもう一回することだね。 [女50古文]  
はい。 [女50古文]  
では一、えーと、坊のかたわらに、昨日(きのう) やったところから行きまーす。 [女50古文]
- (22) とりあえず、じゃ、試験範囲さ、あの一、言っとくから、どっかメモして。 [男20英語]  
うん。 [男20英語]  
まず、えっと、ユニコーンのワークブックは、とりあえずユニットワンと、ツー、のやったところ。 [男20英語]
- (23) えっと、皆さんはお父さん、お母さんに似てますか。 [女40生物]  
ね。 [女40生物]  
そっくりな人もいるかもしれませんね。 [女40生物]

(21) ～ (23) はいずれも、同一話者による前発話と後発話との間に大きなポーズを置き、独立して発せられた「ハイ」「ウン」「ネ」である。(21)(22) は前発話の確認をしながら、また、(23) は共感を示しながら、後続の発話のための発話権維持をしている。いずれも話者と聞き手の間に微妙な空間的・心理的距離があり、聞き手が話者に直接的に答えない、つまり講演のような場で、話者が談話進行のためのバランスやリズムをとるためのものとして発せられている。一般的な自然談話の場合にはほとんど現れないものであろう。

## 4. まとめ

授業談話は知識において「上位者」である教師が進行させ、「下位者」である生徒にその知識を伝授すること、受け容れさせることを基本的な目的とする特殊な談話である。それゆえ、一般的な自然談話とは選ぶことばやその運用の面で、意図的にあるいはおのずと違った傾向が現れると考えられる。『職場』とのフィラー出現様相の違いもそのような視点から説明ができれば。

発話頭で「デ」「ハイ」のような発話境界を明確にし注意喚起したり発話をはっきりと維持するようなフィラーが用いられ、発話末でも、「ハイ」「ネ」のように発話の終了を明示する機能をもつフィラーが用いられるのは、教師の発話内容に生徒の注意を向け、また、説明が始まったこと、続いていること、終わったことを明示して、説明内容を確定する意図によるものと考えられる。

「エート」「アノ（アノ）」「マ（マー）」のようなソフトな断定回避的なものが、間つなぎ語として発話中にはよく現れるが、発話頭にも発話末にもあまり現れないのも、言いよどみを避け、あいまいさを避ける発話意図の反映であろう。

一方で「ネ」が発話頭・発話中・発話末、また一語文フィラーとしても用いられるのは、発話境界を明確にしつつ共感や親しみを求めているのであり、話者である教師の談話進行に生徒を巻き込もうとする意図の表れと見ることができよう。「デ」や「ハイ」の断定的な強さを和らげる、親和的な態度の表明を、この「ネ」が担っているのだと考えられる。もちろん、それが常に成功するかどうかはまた別の問題ではあるが、ここにも授業談話の一つのストラテジーを見ることができる。

#### 注

- (1) 各類型に属する語については[表1]を参照のこと。
- (2) 発話中のポーズ（間）を埋めるために、フィラーでその間をつなぎ発話の展開を整える。（中島 2011:194）
- (3) 「言いよどみ」とは、「ことばや表現につまって発話が完結しないこと」（現代日本語研究会 1997）である。小出（1983）では言いよどみの役割について、「話し手の心的態度を表し、話の速度を下げ、丁寧度を増加させ、話を和らげる」とする。
- (4) 以下、同じフィラーのバリエーションのうち出現数の少ないもの、原型（長音化・縮約化のないもの）ではないものを（ ）に入れてともに示す。ただし、バリエーションがない場合には単独で示し、またバリエーションによって出現の傾向に違いがある場合には本文で触れる。

- (5) 「言いさし」とは「相手のさえぎり、或いは話者の自発的意志によって、発話が完結せず終わってしまった場合」(現代日本語研究会 1997)をいう。中島 (2011:195) では、「言いよどみ」のフィラーに「言いさし」も含めて考えると、小論でもこれにしたがった。

#### 参考・引用文献

現代日本語研究会 (1997) 『女性のことば・職場編』 ひつじ書房

小出慶一 (1983) 「言いよどみ」 水谷修編 『講座日本語の表現[3]話しことばの表現』 筑摩書房

中島悦子 (2011) 『自然談話の文法－疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』  
おうふう

野村美穂子 (1996) 「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語－「フィラー」に注目して－」 『文教大学教育研究所紀要』 5号

山根智恵 (1997) 「話しことばにおけるフィラー～留守番電話の談話と電話の会話の資料をもとに～」 『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』

山根智恵 (2002) 『日本語表現の談話におけるフィラー』 くろしお出版

(こばやし みえこ)